

令和7年度

飛騨市少年の主張大会

～ 発表記録集 ～



主催 飛騨市青少年育成市民会議

共催 飛騨市 飛騨市教育委員会

もくじ

【中学生部門】

踏みとどまれる社会へ	古川 三年	上田 智木	： 1
心からの「ありがとう」	古川 三年	河渡 悠月	： 3
向き合うこと	古川 三年	建村 唯羽	： 5
僕が生まれた意味	古川 三年	船坂 優斗	： 7
改めて考える「当たり前」	神岡 三年	清水 理子	： 9
これまでの私、 これからの私	神岡 三年	蒔田 実音	11



【小学生部門】

小さい学校でも、 楽しい毎日！	山之村 四年	伊後 穂奈美	： 13
大切な人との関わり	神岡 六年	山田 羽琉	： 15
自分を 変えようと思える力	神岡 六年	田家 楓花	： 17
地域の宝を守るために	宮川 六年	藤戸 貴生	： 19
シヤチから見た環境問題 くぼくたちができることく	河合 六年	堀脇 旭飛	： 21
繁殖犬が 大切にされる国へ	古川西 六年	田村 結衣菜	： 23
私の大切な祭り	古川西 六年	谷倉 六花	： 25
みんなでつなぐ 「古川祭り」	古川 六年	柳瀬 咲穂	： 27
挑戦したその先に	古川 六年	栗田 祐乃	： 29
家族の嬉しさ	古川 六年	小谷 奏太	： 31



踏みとどまれる社会へ

古川中学校 三年 上田 智木

「もう疲れた。」「もう終わりたい。」そう言って、多くの子どもたちが、自ら命を絶っています。いじめによって受ける心のダメージ、他人への劣等感、家庭不和、それらによって、世界では、多くの自殺が起こっています。

日本は他の国と比べて、どちらかといえば豊かな国であると僕は思います。しかし、日本での十五歳から十九歳の死亡原因の約半数は自殺なのです。

実は僕も「死んだら楽になるのだろうか」と考えたことがあります。小学生の頃、近づくだけで避けられ、給食の時間、僕がお盆を運んだ際に、嫌な顔をされて消毒でしつかり拭いてから受け取られたりしました。最初は何も思わず、ただ些細な問題としか考えていませんでした。でも、じわじわと確実に、僕の心は削られていました。気づいた時には、深く深く心にダメージを受け、「自殺」という言葉が頭の片隅をよぎりました。

悩みに悩んだ末、勇気を出して、母と担任の先生に相談しました。そこで返ってきたのは、「大丈夫だよ。」「智木は悪くない。」という優しい言葉でした。今まで体に巻き付いていた鎖が、フツとなくなったような気がしました。その一言で、僕がどんなに救われたか。のその後、担任の先生が、相手としてしっかりと話し合える場をつくってくれました。それから避けられたりすることとは全くなり、心も回復して、僕は元気に生きています。

しかし、世界には心の支えがなくて、踏みとどまらずに、「自殺」という橋

を渡ってしまう子どもが多くいます。僕が踏みとどまれたのは周りの支えてくれた人たちのおかげです。もし、その人たちがいなかったら、僕も「自殺」という橋を渡っていたかもしれません。

先ほども言ったように、日本は若者の自殺が多いです。僕はその理由に、「いじめる側の人」が多いということもあると思います。しかし、一番は「いじめを止める人」の少なさが大きな原因であると、僕は思います。

みなさんは、「集団心理」という言葉を知っていますか？ 集団心理とは、集団内で個人の思考や判断が抑制され、集団の行動に影響される心理状態のことを指します。これが日本人は外国人と比べて強いそうです。つまり、止めようと思っている人はいるが、周りが自分と違う行動をしているから自分もやめておこう、と思ってしまう人がいるということです。

実際、僕が避けられていた時も、止めようと思っている人はいたと思います。しかし、それを行動に移してくれた人はいなかった。僕から見たら何もしていないのと一緒に見えました。「あの子は別に止めていなかった。」

「みんな止めようとしていないから。」そういう言い訳が、一人が三人に、三人が十人に、十人が二十人に、人数が増えれば、どんどんブレーキは効かなくなっていくます。最初に、誰かが少しでも勇気を出していれば、救われていた「命」があったかもしれないのです。いじめは立派な犯罪です。そして、それを見ても何もせず、ただ傍観しているのもいじめに加担していると僕は思います。このスピーチを聞いて、勇気を出せば救える「命」があることを覚えていてほしい。

僕は自身の経験から、一人でいる人を見つけたら、声をかけるようにしています。もし、いじめの現場を目撃したとしたら、必ず止めます。それで救われる、尊い命があるからです。また、いじめのことについて相談・頼れる場所を世の中に広めていきたいと思っています。そして、目指していきます。世の中の子どもたちが少しでも、踏みとどまれる社会へ。



心からの「ありがとう」

古川中学校 三年 河渡 悠月

皆さんは、友達、クラスの仲間にはもちろん、家族へ「ありがとう」を伝えていますか。私は、「ありがとう」や「ごめん」が家族に言えませんでした。いつも、そつけない態度で過ごしていました。しかし、私の人生で最大なことが起こってから、私の中で何かが変わりました。

私の家族は、母、妹、私の三人家族です。父は私が小学二年生のときに、帰らぬ人になってしまいました。小二だったので、何が起きているのかわからなかったです。泣くこともできず、母がなぜ泣いているのかわからなかった。しかし、父が帰ってこない日々から、私は初めて「人がなくなる」というのを実感しました。小学校卒業、中学校入学と、父の姿はありませんでした。私は何か大切なものがかけ、心にすっぱい穴があいているような気がしました。

そんな日が続き、中学二年生になった九月のある日、今度は私の大好きな祖父が亡くなりました。その日、私はいつも通り、私の祖父が運転手のバスに乗りました。学校につき、挨拶をしました。私が「ありがとうございました。」と言うと、祖父がいつもの優しい表情で「行ってらっしゃい。」と言いました。それが私と祖父の最後の会話なんて思いもしませんでした。その日の帰り、いつものバスがこず、私は「あれ、バス来ないな。じいちゃん何かあったのかな。」と心配になりました。その日は私の母の車に乗り、家に帰る

ことになりました。母に「今日じいちゃんバスこんかったんやさな。」と伝える

ると、母は、「じゃあ後で家によってみるか。」と言いました。その後、母は祖父の家に见に行きましたが、姿はありませんでした。その時母は、「入れ違ひかな。」と深くは考えなかったようで、次の日になりました。私は、部活があったため、何も知らずに部活をし、家に帰ると、高山にいるはずの祖母が私の家にいました。そこで私は、衝撃的な事実を聞きました。「じいちゃん、今行方不明で探されてるよ。」と。私は、頭の中が真っ白になりました。いとこの両親も、私の母も探していました。しかし、その日の午後、帰らぬ人となって祖父は見つかりました。畑の仕事中、車に乗っていて、誤って川に落ちて亡くなりました。急な出来事だったため、頭が追いつきませんでした。帰ってこない日々には、「どこか長い旅行でもしているのだろう。」と自分に言い聞かせていました。しかし、祖父が帰ってくることはありませんでした。その中で、私はあることに気付きました。「感謝の気持ち、ありがとうが伝えられていない。」ということに。父がいなかった分、母の助け、私や妹の送り迎えをしてくれたのは祖父、色んな所に連れて行ってくれてたくさん思い出が作れたのも祖父のおかげ。父がいらない分の楽しい時間をくれたのは祖父でした。なのに私は、心からの「ありがとう」をしつかりと伝えられていませんでした。それは、恥ずかしさと、当たり前前にそんな日々が続くだろうと思っていたからです。でも、もう伝えることはできません。

父の代わりだった祖父や、祖父が飼っていた犬や猫、大切な家族、古川中の仲間。私の周りの大好きな人たちとすごしてきた日々。私はとても幸せで

す。

今、私は心が不安定になることが多くあります。急に悲しくなって泣いてしまう時、息苦しくなってしまう時もあります。しかし、今私がこうして安心してみんなと過ごしていられるのはみんなが助けてくれたから。ささいなことでも話しかけてくれて、関わってくれたから。そして、一番は、私の気持ちを理解してくれる一番の理解者である家族がいてくれたから。私がこれまで口に出せなかった辛い出来事や思いをここで話せたのは、仲間と家族のおかげです。私から仲間、そして家族へ。「心からありがとう」。



向き合いつと

古川中学校 三年 建村 唯羽

私のコーチはすぐ怒ります。話も長いです。テニスの練習時間よりも、コーチの話の方が長い日もあるし、合計したら多分練習時間と話の時間が同じくらいだと思います。

私はソフトテニス部に入っています。小学生の時に硬式テニスをやっていたのをきっかけに入部を決めました。入部届には、「何かを全力でやり続けられる人になりたい」と書きました。一つの事を全力で取り組み、全力で楽しむ人に私になりたいと考えたからです。そんなことを夢見て入ったソフトテニス部の入部初日。「無理かもしれない」。当時の日記にはそう書いてありました。なぜならコーチがすごく怖かったからです。コートに行つてまずあいさつをする、「服装がおかしい!」「なぜシャツをだしているんだ!」と怒鳴られました。私の頭にはたくさんのはてなが浮かびました。「なぜこんなに怒られるんだろう。」と。

でもそんなコーチを私は尊敬しています。なぜなら良いプレーをしたら全体で「いいね!」つて伝えてくれるし、コーチの指導の考え方に共感できるし、私を人として成長させてくれた人だからです。

もちろん最初から尊敬していたわけではありません。むしろ苦手でした。「ソフトテニスが続けるのは無理かもしれない」と思うくらい苦手でした。「なんでこんなに怒られなきゃいけないの」「何回言われても、できないこと

はできないじゃん」って思っていました。そうしてやる気も失い、だんだん練習にも積極的に参加しなくなりました。

そんなある日。ある大会で、他校の友達に「古川のコーチって怖いけど、一人一人をしつかりと見ていて、愛のある人だよ」と言われました。私は「え！？愛なんてあるか？」と驚きました。でも私は、「あつ、そうか。愛があるから一人一人をしつかりと見ていて、怒ることができるんだ。」そう気づきました。たしかに愛がなければ、嫌われるかもしれないのに怒ることはないし、勝った時に一緒に喜んでくれない。みんなに同じことを言うのではなく、一人一人に合ったアドバイスをしてくれるのも、しつかりと私たちを見ていてくれるからだ。そう思えた日から、私はコーチと向き合うようになったのだと思います。怒られたときは「じゃあ、どうすれば良いのですか？」と聞いたり、違うと思ったことは「違うと思います」と伝えたり。コーチの言葉や行動の裏にある思いを想像し、向き合いました。時には言い合いになって、練習途中にコーチが怒って帰ってしまうこともあるくらい。そんなやり取りをしていると、コーチ自身も私と真剣に向き合ってくれていることに気づきました。そうして、私はコーチとの関わりから「向き合うことの大切さ」を学んだのです。それが分かってから、人と関わることもソフトテニスも楽しくなりました。

例えば、誰とペアを組むかという問題があったときも、コーチが話し合いの時間を作ってくれて、私はたくさん自分の思いを仲間と向き合って伝えたり。そこでペアになった仲間に、自分は何が得意で何が苦手か伝えあって自

分たちに合った戦法を見つけたり。そうやって仲間とコーチとたくさん向き合ったから、納得できる勝ちもつかむことができ、ソフトテニスの楽しさが倍増しました。

これから先、色々な人と関わって私は生きていきます。その中で納得できないと感じることもあるでしょう。しかし、そんな思い一つにとらわれず、相手がどんな思いで何を伝えたいのか考えて、向き合っていきます。それを教えてくれたコーチに、私は心から感謝しています。

「私はこれからどんな事にも誰に対してもまず向き合うことから始めます」
「向き合うことの大切さを教えてくれてありがとう。」



僕が生まれた意味

古川中学校 三年 船坂 優斗

僕は最近、他の人とは違うと感じるようになりました。それは僕が他の人よりも成長が遅いということです。例えば、僕は靴ひもを結ぶこと、はしを正しくもつこと、自転車に乗ることなどが苦手で、いろいろなことが不器用です。また、人と話すことも苦手で、頭の中でまとめて話そうとしても、途中でつまったり、話が長くなったりしてうまく伝えられないこともあります。

こんなふうに、僕は人と比べてできないことに対して、「なんでぼくはみんなのようにできないんだろう」と悲しく感じるようになりました。自分ができないことがあって、悩んでいたりと、助けてほしいと思っていても「できない」と言うことが恥ずかしくて声をかけることができません。「自分なんて…」と自信をなくしてしまうこともたくさんありました。ちゃんとできるようになりたいと思って頑張っても、またすぐに元に戻ってしまいます。そう考えると、こんな自分でこれからどう生きれば良いのだろうと不安になることもたくさんあります。

「自分なんて生まれてきた意味があるのだろうか」「自分が生まれた意味は何なのだろう」とさえ思うようになりました。そんなとき、学校でぼくのことをよく知っている先生と話す機会がありました。僕がそんな悩みを伝えると、その先生は、「あなたの良さは何だと思う？」と尋ねました。僕は「授

業の挙手やあいさつができること」と答えました。するとその先生は、「それもそうだけど、一番は誰にも負けない優しい心があるところだよ」「あなたはいつも誰かのことを一生懸命に大事にしている優しい子だよ」と話してくれました。自分では分からなかった良さがあることを知って、自信がもてたし、うれしくて涙が出ました。母が優しい子になつてほしいと付けてくれたこの「優斗」という名前に恥じない生き方ができている気がして、うれしかったです。それで僕はこう考えました。僕が生まれた意味、それは、自分をあきらめず、自分の夢を叶えるためなんだと。だから、たとえ、他の人ができて自分ができなくても、一生懸命に取り組むことを大切にしようと思いました。

そんな僕には小さいころから変わらない夢があります。それは公務員として、飛騨市役所で働くことです。大好きな飛騨市の良さを伝え、飛騨市を守っていききたい。そう願っています。二年生の職場体験マイプロでも市役所に行きました。市役所ではいろいろな課が市民のために一丸となつて働いていました。また、ハートピア古川で未就学児の子を預かるサービスがあることも知りました。僕は職場体験マイプロを通して、働くのは大変だけど、市民のために力を尽くす姿にあこがれました。

今の僕には公務員になることは難しいことかもしれませんが、たとえばそうだとしても、僕は僕の夢を追いかけています。あきらめたくないです。母からも目標に向かって勉強を頑張った方が良いと言われ、頑張っています。そうやって努力し、僕は必ず飛騨市役所の公務員になります。

これから、僕はたくさんの壁にぶつかると思います。しかし、自分で努力

することを大切にし、家族や先生と相談して乗り越えていきます。夢に支えられて今の僕があるように、僕が生まれた意味は「できる」「できない」なんて関係なく、夢を目指すため。だからこそ、夢に向かって、誰に対しても優しく、精一杯に生きていきます。



改めて考える「当たり前」

神岡中学校 三年 清水 理子

あなたは今、幸せですか。と問われたとき、あなたはどうか答えますか。

以前、私が何気なくテレビを見ていると、世界の幸福度調査において、日本は幸福度指数が諸外国に比べて低いというニュースが流れてきました。なんとなく、「私の幸福度は七〇パーセントくらいかな。」と考えたことを覚えていています。先進国である日本で暮らす日本人の幸福度が低いのはなぜなのでしょう。私の推測ですが、二つの要因があると思います。一つは、日本人の文化の中に、謙虚・謙遜というものが強く根付いているからだと思います。そしてもう一つは、日常生活の便利さ、豊かさに慣れきってしまったいて、自分が幸せであることを認識していない、という点もあると思っています。

私の日常生活の中心には、部活動が大きくなりました。私は、バレー部に所属しています。チームメンバーにも恵まれ、勝利という同じ目標に向かって互いに励まし合って練習したり、なんでもない話をして笑い合ったり、本当に楽しく部活に取り組めていました。

しかし、昨年度末、私の日常生活は大きく変わってしまいました。六時間の授業を終え、下校しようとしていた時でした。左膝に激痛が走り、立っていることもままならず、教室の床にうずくまってしまいました。今まで経験したことのない痛みで、友達や先生が「どうしたの。大丈夫。」と声をかけてくれましたが、返事すらできないほどでした。すぐに病院に搬送され、診

断を受けることになりました。痛みの原因は、左膝蓋骨の脱臼。私の膝にはまだ痛みがありました。が、その後の医者の方の言葉の方が、私にとって痛いものでした。「しばらく、運動はできませんね。四月になっても、リハビリを頑張っていく必要があると思います。」本当にショックでした。バレーの大会の直前だったからです。ケガの内容は事実として受け入れられました。しかし、部活動で大会に向けて努力してきたことが、たった一日で消えてしまった気がして、涙が止まりませんでした。行き場のない悲しみや怒り、後悔があふれてきたんだと思います。

苦しい生活が始まりました。今まで当たり前でできていたことが、できなくなりました。まず、歩いて登下校ができません。毎日、親に車で送ってもらいました。歩けないことも歯がゆかったし、親に迷惑をかけていることもわかっているのに、素直に感謝を伝えられない自分自身も情けなく思っていました。学校では、体育の時間がいちばん辛かったです。私は体育が大好きなので、本当は仲間と一緒に体を動かしたいのに、一人で見学することしかできませんでした。頭では、仕方ないと思いつつも、どこかで悔しさを感じていました。移動教室のときも、友達がいつも一緒に寄り添ってくれて、嬉しさと申し訳なさが混ざった複雑な気持ちでいました。

こんな生活が続いている中、ふと、幸福度指数のニュースを思い出しました。あの頃の私はケガもしておらず、何一つ不自由なく生活していたはずなのに、どうして七〇パーセントの幸せだと思ったのだろう。今の私から見たら、あの頃の私は一〇〇パーセント幸せな人に見えます。そして改めて考え

ると、今の私の幸福度は、そんなに低くないのでは、と考えられるようになりました。確かに、足のケガによって大会に出られなくなったり、生活が不便になったりしましたが、家族が本当に私のことを大切に思ってくれていることや、友達がずっと私のことを気にかけてくれることは、私にとって嬉しい気づきでした。

幸せは、身の周りにありふれているからこそ、気づきづらいのだと感じます。何か、きっかけがあると、改めて自分の幸福度について考えられると思います。私にとって、このケガは大切なことに気づくことができたきっかけでした。今、私の話を聴いてくださっている皆さんにとって、これがきっかけになれば嬉しいです。

私のケガは、まだ完治していません。ですが、私は、一〇〇パーセント幸せです。

最後にもう一度尋ねます。

あなたは今、幸せですか。



これまでの私、これから私

神岡中学校 三年 蔭田 実音

どうしてあの人はあんなに自由なんだろう。どうしてこの人はこんなに真面目なのかな。

人によって、性格は違う。自分以外の人と接することでも思うことも、人それぞれ違う。性格の違いによって、ずれが起きて衝突したり、意気投合して大切な人になったりすることもある。人間関係はジグソーパズルに似ている。得意や不得意、性格やこれまで築き上げてきた価値観など、一人一人違う形を持っている。そのピースの形がぴったり合う人と出会ったとき、居心地の良さを感じ、信頼できる関係を作ることができると思う。だからこそ、私は今まで、性格が違う人、合わないかと思う人とは出来るだけ関わらないようにしてきた。相手と衝突し、険悪な関係になってしまうのが嫌だったからだ。

小さい頃は、誰とでも関わることができていた。公園に行くと、知らない子と遊んだことも何回もあった。自分の心と体が成長するにつれて、自分以外の人の性格がわかるようになってきた。すると、急に親しくない人と関わることが怖くなった。自分とは絶対に合わないと思う人がいると知ってしまったからだ。そして、私はだんだんと自分で「合わないかも」と判断した人とは深く関わらないようになってしまった。

そうなってしまったことで、普段の生活にも弊害を感じるようになった。授業中の意見交流で、あまり話さない人と一緒になった時は、「怖い」「うまく話さなきゃ」という思いばかりが浮かんできて、結果的に声が小さくなり相手を困らせてしまうことが起こるようになった。

ほかにも、何人かが話している中に自分から入ることができなくなった。話している人に用事があつても、「今話しかけたら嫌な気持ちにさせるかな」と言う考えが先に来てしまい、話しかけるタイミングを失ってしまうようになったのだ。

けれど、そんな私を変えたのは一人の友人だった。別の友人に紹介されて彼女と出会った私は、最初は「自分と違うタイプの人だな」と、いつものように積極的に関わることを諦めていた。けれど、何度か関わるうちに彼女の色々な面が見えてきた。

今まで私が避けてきたのは、自由だったりマイペースだったりする人だ。私はどうしても時間や期限が気になり過ぎてしまう。だから、自分のペースで動いている人に対して、つい急かしてしまいそうになる。けれど彼女は、私が焦りすぎたり心配しすぎたりしていると、いつも落ち着かせてくれる。それだけではない。普段はマイペースだと思っていた彼女だが、私が悩んでいると静かに寄り添って話を聞いてくれる。おかげで、悩んで苦しい時も一人で抱え込むことなく彼女に相談して、気持ちが楽になることができた。

もちろんいいことばかりではない。彼女は自分のペースで動いているだけに、私がそれに対してイライラしてしまい、喧嘩になることもある。け

れど、すぐに自分の悪かったところを考えて、仲直りすることが多くあった。彼女と長く一緒にいるからこそ、お互いの意思を尊重しなければ、この関係は続かないと思うようになってきたからだ。お互いに相手を大切にしようとしているから、今までこの関係が続いているのだと感じている。

私には、性格が真逆の友人がいる。それでも一緒にいられるのは、自由さだけではない彼女の優しさや気遣いを知っているからだ。

私は、彼女のおかげで、前よりも多くの人と関わろうとすることができている。相手のことを知ろうとせずに関わる世界を狭くしていた自分から、少しずつ変わろうとしているのだ。これからも、たくさんの人に出会うだろう。人生はジグソーパズル。何もしなくても、自分にぴつたりと合う場所や人にきつと出会える。しかし、この経験からパズルの形を決めつけず、相手への気遣いや優しさを持ち、少しずつパズルの形を変えることも大切だ。これからの私は、これまでの自分の形に捉われず、もっと自由に形を変えていくのもいいのかもしれない。性格が真逆だけど、友達になった彼女に教えてもらったことを忘れずに過ごしていきたいと思う。



「小さい学校でも、楽しい毎日！」

山之村小学校 四年 伊後 穂奈美

みなさん、私のいる山之村小学校全員の仲間は何人か知っていますか？4年生が2人、5年生が1人、6年生が4人の全員で7人です。「3年生から下の学年はいないの？」と思った人もいますが、実は私たち4年生が一番下の学年で、3年生以下は一人もいません。「人数が少ないから楽しくないのかな？」と思われがちですが、そんなことは全然ありません。小さい学校だからこそその良さがたくさんあるからです。

まず、全校みんなが家族のように仲がいいことです。学校には教室のかべがないので、同じ学年の仲間だけでなく、高学年や中学生の教室に行っても、だれとでも気軽に話すことができます。大きな学校では学校の全員と遊ぶことはできないと思いますが、休み時間や放課後に中学生や先生も一緒になって「おにごっこ」や「ドッジボール」をして遊ぶことができます。失敗したりいやなことがあったりしても、学校の全員の仲間が、真剣になって優しく声をかけてくれたり、はげましたりしてくれます。だから、毎日みんなの明るい笑顔があふれているすてきな学校です。

次に大きい学校だと6年生がリーダーとしてみんなを引っっぱっていくと思いますが、わたしのような一番下の学年でもリーダーとなって活躍できるところが良さだと思います。学校には「みんながリーダープロジェクト」という「自分の好きや得意」をいかして、みんなの笑顔のために取り組む活動があ

ります。私はみんなが健康になってほしいという願いから、運動リーダーをしています。オリジナルの体操を考えたり、みんなで参加するソフトバレーボール大会を計画したりしました。みんなや地域の人たちが「楽しかったよ!」

「もう一回やりたい!」と言ってくれるのが、とてもうれし自信になります。うまくいかないこともあるけど、「自分らしさ」をこのプロジェクトに生かして、みんなが笑顔になるための活動をこれからもたくさんやっていきたいです。

他にも地域の方々が温かいという良さがあります。運動会などの行事だけでなく、授業や総合、色々な場で学校に来て、優しく教えてくれます。それに地域のだれもが私たちのことを知っているので、「ほなみちゃん元気か?」と声をかけたり心配したりしてくれます。これも小さい学校の良さだと思います。

しかし、授業では人数が少ないので、仲間の色々な考えを聞いたり、話したりすることができません。だから今年は、職員室に行って先生たちに質問したり考えを説明したりしています。一人やクラスで考えても分からなかったり、解決しなかったりしたことが、たくさん意見を聞くことで、まとまったり、新しい発見をしたりすることができています。

こんなに楽しい毎日ですが、ひとつ大きな願いがあります。それは上の学年の人にしてもらったように、私も下の学年の子に優しく教えてみたいということです。しかしそのためには、「山之村のみりよく」をどんどんアピールして、山之村に引越してきてもらえる人を増やさなければいけません。山

之村には牧場や寒干し大根など有名なものもありますが、自然の美しさやおいしい野菜など、他にもいっぱいみりよくがあります。わたしは総合学習で山之村の景色のすばらしさを調べています。すてきな景色をアルバムにまとめて、牧場に来たお客さんやキャンプをしに来た人に見てもらいたいと思っています。どんどん山之村の良さを広めることで、少しでも山之村に住んでくれる人が増えたらいいと思います。

このように、人数は少ないけど明るくて楽しい学校です。いつまでもこのすてきな学校が続いてほしいなと思っています。



大切な人との関わり

神岡小学校 六年 山田 羽琉

皆さんには、大切な人がいますか。私にはいます。例えば、友達、家族などです。皆さんにも大切な人が一人でもいるのではないのでしょうか。急に、その大切な人にもう会えないとなったら、何を思いますか。私は、悲しくなります。皆さんは、どうですか。皆さんも私と同じだと思います。だから、大切な人との時間は大切に使うてほしいです。

人は、大切な人と過ごすストレスが減るそうです。たしかに私も、友達や家族と過ごしていると安心した気持ちになります。

私には大切な友達がいます。その友達との思い出は、社会見学に行ったことや、遊んだこと、町たんけんや、日常生活で遊んだことなど、数えきれないほどたくさんあります。でも、そんな友達と過ごす時間は、当たり前ではありませんでした。一年生の時、新型コロナウイルスで、学校が休校。待ちに待った小学校での生活。友達できるかな。色々と小学校で友達と過ごせる日々を思い出していました。けれど、友達にも先生にも会えませんでした。休校が終わり、マスクでの登校。友達も少しずつふえて、友達と過ごせる時間を「楽しい。」と思ったことを覚えています。この時のことを思い出すと、今では当たり前になっている楽しい日常がありがたく思えます。そんな日々を過ごしていた三年生の時、大切なクラスメイトが引っ越すことになりました。そのクラスメイトは、面白くて、明るくてクラスにとってなくてはなら

ない存在でした。その子は迷路を作るのが得意で、私もその迷路でいっしょに楽しく遊んでいました。引越すと聞いて、クラスメイトが一人いなくなることが信じられなくて、悲しかったです。大切な友達と過ごせるというあたり前がくずれるようでした。そうだ、あの時も。

保育園のとき、おばあちゃんの家にモカちゃんという犬がいました。いつもおばあちゃんの家に行くと、きんきん鳴いて寄ってきます。時にはかんだり、時には一緒に遊んだりしていました。私にとってモカちゃんは、大切な家族のような存在でした。そんなある日、おばあちゃんの家のモカちゃんがいつものように鳴きながら来てくれなくなりました。少し前から病気だったそうです。モカちゃんが病気でいなくなってしまったと知った時は、悲しい気持ちや、「もっと遊べばよかったな。」「もっと一緒にいたかったな。」という後悔でいっぱい、涙がでてきました。いつも一緒に遊んでくれたモカちゃんがいなくなって、今も悲しいです。けれど、もういません。大切な存在はいついなくなるか分からないから、一緒に過ごせる毎日を大切にしないといけないのだなと思いました。

今、私と一緒に遊んでくれる人、私の話を聞いてくれる人は、あたり前にいるわけではないと思います。だからこそ、今しか言えないことや、やれないことをして、大切な人と過ごせる時間を私は大切にしていきたいです。

家族のみんな、いつも相談にのってくれたり、行きたい所に連れて行ってくれたり、学校へ行くのを見守ってくれたりしてくれて、ありがとう。おかげで、毎日元気に過ごせます。友達のみんな、分からないところがあったら

教えてくれたり、不安なことを支えてくれたりしてくれて、ありがとう。おかげで、分からないことも分かるし、元気に過ごせるよ。学年目標「自信」六年生みんなで達成していこうね。

皆さん、毎日会っている自分の大切な人と過ごせる時間を大切にしていきたいでしょう。私自身、決してあたり前ではない自分の大切な人との時間に感謝して、日常生活を過ごしたいです。



自分を変えようと思える力

神岡小学校 六年 田家 楓花

皆さんは、自分を「変えよう。」と思ったことはありませんか。または、「變わりたい。」と思ったことはありませんか。私はあります。自分を変えようと思いい、色々なことにチャレンジをしていきました。

私が自分を変えたいと思ったのは、四年生のころです。その時の私は、決まった友達にしか話しかけられない、前に立って注意する勇気も出ない、ちよつとしたことで落ち込んでしまう自分でした。そんな自分のことを私は、「勇気が出ないから仕方ない。」とあきらめていました。しかし、父と母はそんな私に、「自分が変わっていくことが大事だよ。」「ちよつとしたことで落ち込んでいても仕方がないよ。」と言い続けてくれました。四年生の私は、父と母に言われたことをもう一度一人で考えてみました。「自分は変わった方がいいのかな。」とじっくり考えました。考えて、考えて、私は「今のままじやだめだ、変わらないと。」と思いました。父と母の言葉をきっかけにして、勇気を出して色々なことにチャレンジしてみました。

そんな時、六年生を送る会という大きな行事の実行委員を決める機会がありました。私は、実行委員長に立候補しました。実行委員長とは、みんなの意見をまとめたり、できていない人に、「こうするといいよ。」とアドバイスをしたりしなければならぬ仕事です。実際にやってみると、緊張もほぐれていき、六年生を送る会は大成功。六年生が喜んでくれるすてきな会になり

ていたら、色々なことにチャレンジしてみてください。

ました。心の中で「よかった。」と思いました。実行委員長をやってみたことで自信がつき、他のことにもチャレンジしていこうと思いました。そして、五年生の終わりに児童会長に立候補しました。児童会長とは全校の中心となつて、みんなを支えていく仕事です。児童会長になつて、みんなの前に立つことが増え、みんなの前に立つても緊張しなくなっていきました。もし、四年生までの自分だったら、みんなをまとめたり、仲間に注意をしたりはできなかったと思います。四年生までの勇気の出なかった自分を、両親に励まし続けてもらったおかげで、「変わった方がいいのかな。」と考えて「変わろう。」と思えました。だからこそ、今児童会長ができているし、五年生で実行委員長ができたのだと思います。父と母には「自分を信じて声をかけてくれてありがとう。」と感謝をしています。恥ずかしいと思わず、しゃきつと堂々と「自分是可以る。」と自信をもつことで、今までできなかったことも出来るようになりました。

私のように色々なことにチャレンジして、成功している選手がいます。その人は、大谷翔平選手、イチロー選手です。二人は、世界で活躍する選手です。私が感じているよりもさらに大きなプレッシャーを感じながらも、負けずに、高いパフォーマンスをしています。「自分は出来る。」と信じてプレーしています。

今、「自分はできない。」と思っている人は、「自分は出来るかもしれない。」という気持ちを大切にして過ごしてほしいと思います。人は変わることが出来ます。皆さんも、「自分は変わったほうがいいかな。」などと少しでも思っ



地域の宝を守るために

宮川小学校 六年 藤戸 貴生

ぼくは、宮川町に住んでいます。総合的な学習の時間に宮川町を探究して、今の宮川町の人口はどんどん減っていて、高齢化率が上昇している中で、地域の宝が大変なことになっていることを知りました。

探究学習では、宮川の宝を後世に残そうと頑張ってみえる方と関わってきました。例えば、飛騨みやがわ考古民俗館を必死で守ろうと活動されている方々です。その姿を見て、素てきだなあと思いました。そして、少しでも多くの人が考古民俗館に来てくださるように、自分たちでできることをしてきました。ぼくは石棒のガイドをして、「そうなんだ。」など、石棒について知ってもらえた反応がうれしかったです。そして、自分自身も石棒のことや考古民俗館のことを深く知ることができて、もっと考古民俗館のことが好きになりました。

ガイドをするために、地域の方が土器や民具のことを教えてくださったり、民俗館では、ガイドを聞いてアドバイスをしてくださったりするなど、たくさん協力してくださいました。地域の宝を大事にすることは、地域が一つになって、協力して守っていくことだと思いました。

そんな宮川には、考古民俗館だけではなく、池ヶ原湿原という宝があります。池ヶ原湿原を守り、湿原のよさを伝えていこうと活動している方々もみえます。自然が豊かな宮川町の中でも、池ヶ原湿原はミズバショウやリュウ

キンカ、サワオグルマなど、水辺にしか咲かない植物が群生する貴重な場所です。鳥のさえずりや水の流れる音が心地よいです。季節によって姿を変えるので、何度行っても飽きません。毎年行っていますが、その度に新しい発見があります。ぼくの大好きな場所の一つです。高齢者や車いすに乗っている方も散策しやすいように、広い木道もあります。

でも、残念なことに、池ヶ原湿原を訪れる人は年々少なくなっています。そして、イノシシなどの動物が植物を掘り返してしまったり、アオサギがイワナを食べてしまったりするなどの被害が出ています。その上、ヨシが二メートル以上も伸び、太陽光をしゃ断してしまうので、湿原にある植物が育たなくなっています。それらの問題を解決するために、池ヶ原湿原保護センターの方やボランティアの方々が、水の管理をしたり、電気柵を作ったり、ヨシを刈ったりして湿原を守ってみえます。人の手で守られているからこそ、美しい景色が保たれているのです。池ヶ原湿原を守る活動を知って、その活動と池ヶ原湿原の大好きなところをパンフレットにして、いろいろな施設やお店に置かせてもらいました。でも、ピーアールが少し足りなかったと思っています。

そこで、今、ぼくたちは池ヶ原湿原の素晴らしさをたくさんの人に知ってもらえるように、探究をしています。ぼくは池ヶ原湿原のガイド活動で、春だけじゃなく、夏や秋など、あまり知られていないことを広めていきたいです。来た人の心に池ヶ原湿原の景色が焼き付くようにガイドをしたいです。

ぼくは、宮川町のことを、ただ住んでいる場所としか思っていなかった

けれど、みやがわ考古民俗館や池ヶ原湿原の探究をしてきて、今までこんないい所をどうして知らなかったのだろう、こんなにいい場所は絶対に残していきたいと思うようになりました。宮川のことがいっそう大好きになりました。

そして、探究学習を通じて受け継いだ、ふるさと宮川を愛する気持ちもち続けて、この宮川にある宝を仲間たちと守っていききたいです。今自分ができることを精一杯やっていきたいです。中学校や高校でも、どうしたら地域の宝を残し続けられるか考えて、行動していきます。



シャチから見た環境問題くぼくたちができることく

河合小学校 六年 堀脇 旭飛

僕は、シャチがとても大好きです。白と黒の美しい模様や、スリムだけれどもしっかり筋肉がついたボディがとてもかっこよく美しいからです。また、シャチには、水族館で魅せる可愛らしい行動、野生で魅せる力強い行動、仲間と連携して大きな鯨を仕留める強さ、獲物の弱点をつく知性があります。美しさ、かっこよさ、可愛らしさ、強さ、知性を兼ね備えている、とても素晴らしい生き物だから好きです。

僕は、大好きなシャチのことを調べていくうちに、シャチを取り巻く環境が悪くなっていることを知りました。そこで、シャチから見た環境問題について考えていくうちに、三つの問題点に気づきました。

一つ目は、地球温暖化の影響があります。北極・南極圏に生息しているシャチは、獲物であるアザラシやペンギンがいる氷が溶けてしまい、狩りができなくなり、餓死してしまうことがあるそうです。また、工場から廃棄される有毒ガスには、シャチにも、餌になるサケやニシンにも悪い影響があります。

二つ目に、過去に乱獲をされ、数が減ってしまったことです。獲られたシャチの脂肪はランプなどの燃料に、肉は食用に、骨は道具や装飾品に使われていました。現在では、ワシントン条約により乱獲を防いでいます。

このままシャチが数を減らしたら、繁殖力が低いシャチは、さらに数が減

ってしまいます。そして仮にシャチが絶滅してしまったら、その死骸や食べ残しを食べて生きているプランクトンが減り、それを食べる魚が減り、またそれを食べる生き物が減り、最後には、海の多くの生き物が絶滅してしまう可能性があります。

三つ目に、人間が捨てたゴミが、海に流れ着き、シャチにからまるなどして死んでしまうことです。ゴミを小さい魚が食べ、それを食べた魚たちが死んでしまい、さらに、それを食べる魚が減ります。その結果、シャチの食べ物も少なくなってしまうです。また、ゴミを食べた魚を食べたシャチの胃にもプラスチックゴミが蓄積してしまうこともあります。

こうしてシャチがどんどん減っていくと、海の生態系がくずれて、魚を多く食べる日本人の食生活に影響が出てきます。また、魚の量が少なくて獲る量に規制がかかり、漁で取れる魚が減り、漁師さんたちの生活が苦しくなってしまうです。

こんなことでいいのでしょうか。僕たちは、この状況をだまっで見ているしかないのでしょうか。しょうがないかと諦めていたら、僕の大好きなシャチが本当に絶滅してしまうかもしれません。

そこで僕は考えました。自然環境をすぐによくすることは難しいけれど、これ以上悪くならないように、ゴミを減らすことはできるのではないかと。

まず、ゴミをなるべく出さないようにするために、マイバッグやマイボトルを常に持つていくことや、ゴミをポイ捨てしないこと、紙ゴミと生ゴミ、プラゴミを分別して捨てることができます。また、3Rを意識して生活する

こともできます。さらに、地域のゴミ拾い活動に参加すること、環境問題について学び、それを周りの人に伝えて環境意識を向上させることなどもできます。

僕は、買い物をするときに、マイバッグを持参して使ったり、プラゴミ、紙ゴミをしっかりと分別して捨てたりしています。ぼく一人だけがこの課題を意識したり、取り組んだりしても、なかなか解決しないので、大勢の人がゴミ問題について意識したり、取り組んだりすれば、身近なことから環境問題を解決することにつながるのではないかと思います。

これからも僕は、シャチやシャチを取り巻く環境問題について考え、行動していきます。そして、今よりもっとシャチのことを知って、好きになりたいです。



繁殖犬が大切にされる国へ

古川西小学校 六年 田村 結衣菜

私の家族の一員に「チロル」という名前の犬がいます。チロルは今十才で、五年前に私の家にやってきました。私が家に帰ると、すぐに「抱っこして」と寄ってきます。私はチロルを抱っこするのが大好きです。

今は元気に過ごしているチロルですが、家に来たばかりのころは、全く違う姿でした。チロルが我が家に来た時、足は汚れていて、歯はボロボロ。毛は汚れを隠すためなのか、バリカンで短く刈られていました。犬が大好きなはずのボールも、怖がって近づこうとしません。少しの音にもビクビクして、外に出すと、体を震わせて怖がっていました。私たち家族は、

「もしかしたら、ボールや大きい音で、怖い思いをしてきたのかもしれない。」

と話していました。動物病院の先生からも、

「こんな歯の悪い犬はみたことがない。今まで全く大切にされてこなかったんだね。」

と言われました。そして、チロルは、歯をぬく手術を受けることになりました。今では歯が一本もありません。とてもかわいそうでしたが、元気に生きていくために必要なことでした。家に来てからのチロルは、家族みんなで工夫して、だんだん元気になりました。でも、ボールは今でも怖がります。なぜ、チロルはこんなにもひどい状態だったのか。それは、チロルが「繁

殖犬」だったからです。みなさんは、繁殖犬がどんな犬か知っていますか。繁殖犬とは、ペットショップなどで売られる子犬を産ませるために飼われる犬のことです。中には、何度も無理に子犬を産まされ、体がボロボロになってしまいう犬もいます。歯が悪くなったり、毛が汚くなったりするだけではありません。心も深く傷ついてしまいます。チロルのようにボールや音が怖くなってしまう犬も少なくありません。

日本には、そんなかわいそうな犬がたくさんいます。

今、日本では繁殖犬として使われた後に、いらなくなった犬が増えていて、大きな問題になっています。人の勝手な都合で、一生を台無しにされています。私はそんな人たちに怒りを感じます。命を物のように扱うことは絶対に許されないと思います。

この問題について、自分に何ができるかを考えました。まず大切なのは、「繁殖犬」という存在をたくさんの人に知ってもらうことです。私もチロルが家に来てくれなかったら、きっと知らなかったと思います。チロルが家族になってくれたからこそ、この問題を知ることができました。だから私は、少年の主張大会で、この話をしようと思いました。この問題を解決するためには、まず「知ること」が大切です。「繁殖犬」の存在や、どんな生活をしているのか、どんな一生を送っているのかを「知ること」が最初の一步だと思います。そして、そのようなことを「知ること」ができれば、「行動しよう」という気持ちにつながれると思うからです。

みなさんも一緒に繁殖犬のことを考えてみませんか。私は、チロルに出会

えたことに感謝しながら、これからも命を大切にする気持ちを持ち続けていきたいと思います。そして、繁殖犬を含め、身近な動物が大切にされ、人と一緒に仲良く生活していけるようになることを願っています。



私の大切な祭り

古川西小学校 六年 谷倉 六花

この音を聞いたことはありますか。これは私が住んでいる古川町太江という地域で毎年四月二十八日に行われる祭りです。私にとってこの鐘は、

「いよいよお祭りがはじまるな。」

と、気持ちが高まる特別な音です。

太江は小さくて静かな町です。普段はとても落ち着いていてのんびりとした時間が流れています。でも、祭りになると町全体の雰囲気がガラッと変わり、子どもから大人までみんなの顔が明るくなり、町全体が一つになるような感じがします。私はこの空気が大好きです。なぜなら、みんなが笑顔になれるからです。

私は、四年生から「闘鶏楽」という踊りに参加しています。参加しようと思ったきっかけは、姉が楽しそうに踊っているのを見てきたからです。「いつかはやってみたい!」と思っていました。でも、実際にやってみると想像以上に大変でした。祭りが近づく毎週土日に練習があります。せつかくの休みなのに、夕方から練習があるので遊ぶ時間も少なくなってしまいます。踊りは体を大きく動かすのでとても疲れるし、動きも決まっているので覚えるのにとっても時間がかかります。練習の時は何度も「休憩はまだかな…」と思います。休憩が終わって、

「はい、もう一回やるよ。」

と言われると、正直「まだやるの…」と思うこともあります。つらくて「もう嫌だなあ」と思うことが何度もありました。見て楽しむ方がいいなあと思つたことも何度もあります。それでも練習を頑張つて、本番を迎えたときに、お父さんやお母さんが、

「よかったよ！」

と言つてくれたし、姉からも、

「かつこよかったよ！」

とほめてもらえてとてもうれしかったです。そして、何よりも地域の人たちが笑顔で「すごいね」「よかったよ」と言ってくれたのが、とてもうれしかったです。そのときに、「大変だったけど、やってよかったな」と心から思えました。今では、毎年この祭りに出るのを楽しみにしています。私にとって「またがんばろう」と思える大切な祭りです。

でも、最近は少し心配なこともあります。それは、町には人が少なくなつてきて、祭りに出る人も減つてきていることです。近くの町では、祭りを小さくしたところもあるそうです。中には、祭りをなくしたところもあると聞きました。そんな話を聞くとなんだかさみしい気持ちになります。祭りは、町のみんなが一つになって笑顔になれる大切な時間です。だから私は祭りをなくしたくありません。大変だけど続けていきたいと思っています。祭りを楽しく続けていくために、私たちにできることを考えていかなければなりません。例えば、学校や習い事で忙しくても練習にできるだけ参加すること。

町を離れて暮らしている人に声をかけて一緒に祭りに出て楽しむこと。小さなことでもみんなで力を合わせて、いつまでも楽しめる祭りをどんどん続けていきたいと思っています。

私はこれからも、祭りに参加して地域の人たちと一緒に祭りを盛り上げていきたいです。そして、いつか自分より年下の子たちに楽しい祭りを伝えていけたらいいと思っています。この鐘の音が、毎年ずっと響き続けるように。



みんなでつなぐ「古川祭り」

古川小学校 六年 柳瀬 咲穂

夜の町に太鼓の音が響きわたり、人々の活気にあふれるユネスコ無形文化遺産を知っていますか？それは、古川祭りです。毎年、四月十九日と二十日に、古川を代表するお祭り「古川祭り」が行われます。私は今年初めて古川祭りのいろいろな活動に参加しました。

私が今年の古川祭りで頑張ったことの一つは獅子舞のときの笛です。私の地区は「宮本」です。宮本では、学生が笛や太鼓を演奏し、地域の人に獅子舞と一緒に回ります。私は、公民館で行われる練習の楽しそうな声や、カッコいい姿を知っていたので、笛の練習に本気で取り組みました。それでも、なかなか覚えられませんでした。音が出なくて、とても辛いときもありました。そんなとき、上級生の人たちが私をばげましてくれたり、ていねいに教えてくれたりしました。私ができなくても、怒らずに優しく教えてくれた上級生に感謝したいです。おかげで、最初は「やりたくないな」と思っていた練習も、本番はとても楽しかったです。私は、舞姫もやっているので、本番は短い時間しか笛が吹けませんでした。が、「もつと吹きたい！」「楽しい！」と思いました。獅子をやっている人たちも汗だくになりながら、一生懸命やっています。獅子をやっている人は、学生があいさつや返事をしないと厳しく怒ります。でも、そのおかげで、本番ではしっかりあいさつをしたり、大きな声で返事ができたりしたのだと思います。今まで、獅子が怖かったけ

ど、今回の祭りを通して、獅子役の人もたくさん努力して地域のために頑張っているのだと感じました。

二つ目は、舞姫です。二日間で、六キロ以上歩きました。慣れない衣装を着て、ずっと体勢をキープしたり、草履をはいて歩いたりするのは疲れるし、足は痛くなるし、大変でした。でも、みんなで励ましあってがんばりました。行列の最中に、友達や知り合いが、「頑張って！」と声をかけてくれ、元氣をもらいました。いろいろな人たちが私たちの服装を見て、「かわいい！」「おしゃれ！」と言ってくれたり、座っているだけでも、写真を撮られたり、「一緒に写真を撮ろう」と言ってくれる人もいたりして、嬉しかったです。

他にも、おじいちゃんが起し太鼓の総司を務めて感じたことがあります。起し太鼓の出發を待っていると、出發式が始まりました。おじいちゃんは、出發式のときに、出發の言葉を話したり、「若松様」を歌ったりしました。私のおじいちゃんは、普段あまり人前で話したり、歌ったりしないので、おじいちゃんの新たな一面を見て、いとこ全員でびっくりしました。祭りが終わってから、おじいちゃんに総司のことを聞きました。三ヶ月前から準備を始めることや、みんなのまとめ役でもあり、大きな責任を負うので、総司には覚悟が必要なことを教えてもらいました。おじいちゃんにとっても、祭り当日にやぐらの上から見た提灯の灯りと起し太鼓の風景は心に残るもので、朱雀組の力を改めて感じ、みんなの力があつてこそその祭りだと言っていました。そして、私のひいおじいちゃんも総司を務めたことも知りました。

私は十二年間、こんなにもたくさんの方が祭りに関わり、祭りを成功させ

るために努力していることを知らずに、祭りに参加していたことを少し後悔しました。私が今年の祭りで学んだ「祭りに対する人々の努力」をみんなに伝えたいし、知ってほしいです。この祭りを通して、私の中で古川祭りへの思いが少し変わったと思います。古川祭りは、地域の人々が力を合わせて創り上げ、代々受け継がれている祭りです。そして、私も古川祭りにたずさわる一人であることに気がつきました。地域の人々のこれまでの努力を知ったからこそ、私も本気で古川祭りに関わりたいし、古川祭りを守っていきたいです。



挑戦したその先に

古川小学校 六年 栗田 祐乃

「みなさんは何かに挑戦していますか？」

これまでの私は、人前で説明したり、話したりすることが苦手でした。その理由は、挙手をして答えを間違えたらどうしようと怖かったからです。だから、たくさん挙手をして、自分の意見を言えている人が私の憧れでした。そんな人に近づきたくて、自分を変えようと、私はこれまでたくさんのことに挑戦しました。

一つ目は班長です。初めは、班長から始めてみることにしました。班のみんなの意見をまとめたり、班員を並べせられたりするようになってきた私は、次に学級長に挑戦してみました。学級長では、話し合いの司会進行ができるようになりました。けれど、「クラスのみんなを最後までまとめられた？」と聞かれると、自分では、あんまりクラスのみんなをまとめられなかったのではないかな、と思うこともありました。その理由は、だめなことをしっかり注意することや積極的に挙手することがあまりできていなかったからです。その反省を生かし、次に応援団に立候補しました。最初は、全校をまとめられるか不安でした。応援団になって、最初のころは、昼休みの応援団の集まりが「大きな声を出さないといけないのではないか。」「自分だけほかの人より声が小さかったらどうしよう。」と、怖かったけど、赤団のみんなと一緒に替え歌や振り付けを考えていくうちに、少しずつ大きな声を出すことへの抵

抗がなくなっていました。結団式で、応援団になった一人一人が思いを話すときに、今までで一番大きな声が出せたと思います。自分でもこんなに大きな声が出せるんだとびっくりしました。クラスのみんなや、担任の先生に「祐乃さんすごく大きな声が出せていたよ。」と言われて、とても嬉しかったです。各クラスに歌や踊りを教えていくうちに、たくさんの人に説明する力と、人前で大きな声で話す力がつきました。「もつとここは、こうしたほうがいいんじゃないかな」などと、自分の意見がしつかりと言えるようになってきました。もつと全校のために頑張りたいと思った私は、美化委員長に立候補しました。今、美化委員長をしていて、全校をひっぱっているか不安だし、いろいろな意見をまとめることも、難しいと感じています。でも、自分だけの意見ばかりではなく、みんなの意見を取り入れようと心がけています。

学校以外で、もう一つ努力したことが習い事のピアノです。五年生では、古川小学校の校歌と「ビリーブ」のオーディションに挑戦しました。校歌も「ビリーブ」も絶対に受かるという自信がつくぐらい必死に練習しました。一番難しかったのが、指揮者に合わせて弾くことです。どうしたら、指揮者に合わせて弾けるかな、と自分で考え、いろいろな方法を試してみました。校歌のオーディションは落ちてしまったけど、その負けたときのくやしさがまた自分を強くしてくれました。「ビリーブ」はオーディションに受かり、卒業式に指揮者に合わせて弾くことができました。

たくさんすることに挑戦して、失敗して、緊張してきた私は、昔と比べるとすごく成長したと思います。なぜなら、苦手なことにも向き合って自分を変

えようと努力できているからです。学級長や応援団など、立場があることでその役目にふさわしい姿になるように、頑張ることが出来ます。そして、挑戦することで、新しい自分に出会えます。挑戦してうまくいかなかったとしても、それは必ず自分の力になります。経験したからこそ得られるものがあります。挙手が苦手な人や、人前に出ることには緊張する人たちが、私の話を聞いて、少しでも挑戦できるようになってくれたらうれしいです。もし挑戦することに勇気が出ずにいる人がいたら、私と一緒に一歩踏み出してみませんか？



家族の嬉しさ

古川小学校 六年 小谷 奏太

みなさんには、家族がいるだろうか。ぼくは、昔「家族がいるのは当たり前だろう。」と思っていた。しかし、世の中には、戦争や自然災害、病気などで家族がいなくなり、自分一人だけになってしまった人がたくさんいる。違う世界で生きているぼくたちには、家族が当たり前のようにいる。多くの人が、「家族のありがたみ」、「家族と過ごせる嬉しさ」、「家族の大切さ」に無感心だ。だからぼくは、みんなに、「家族のありがたみ」、「家族と過ごせる嬉しさ」、「家族の大切さ」をよく知ってほしい。

ぼくは、去年お父さんの仕事の関係で、休日しか会えなくなった。最初は悲しかった。しかし、だんだん慣れ、悲しくなくなった。今思うと、その時は、まだ「家族と過ごせる嬉しさ」が、あまり分かっていなかったのだと思う。

そして今年、お父さんが海外で働くようになってしまった。聞いた時は、「去年と同じように、またどこかで会えるか。」と軽い気持ちだった。だが、今回は違った。メールや電話などでしか話すことができない。また、苦しく、悲しかった。しかし、時間だけが経ち、気持ちも少しずつ変化した。そして、「ぼくのような状況なのは、ましな方だ。」と思うようになった。なぜかというと、この世には家族がいなくて、一人で生きている人がたくさんいるからだ。一人で生きている人は、お母さん・お父さん・姉・妹・兄・弟などの、

誰かには、会いたはずだと思う。生まれた時から親のいない赤ちゃんだって大きくなれば、一度だけでも、家族に会いたいと思うはずだ。「なぜぼくたち、私たちは、家族に会いたいのか。」ふと頭の中で思い浮かんだ。その理由は、人それぞれあると思う。しかし、ぼくが思うことは、「心の支えとなる存在」、「安心できる存在」「助け合える存在」という「存在」という言葉の力が大きい。他にも、「一緒にいると落ち着く存在」、「守りたいと思う存在」たくさん「存在」がある。ぼくにとって「存在」は、大事であり生きている証である。

ぼくが「家族がいてよかった。」と思う時は、家族みんなで話す時、家族みんなで何かをする時などである。一緒にいると落ち着いたり、安心したり、嬉しかったりする人たちは、「家族が好きだから」が大きいと思う。ぼくのお父さん、お母さんから見て一番嬉しいことは、「元気な姿を見せてくれる」ことだとぼくは思っている。他にも、一緒にお出かけしたり、話し相手になってくれたりすることで自分も相手も元気になる。そういつた時に、生まれる言葉は、「ありがとう」である。身近にひそんでいる、簡単に言えてしまう言葉かもしれないが、「ありがとう」が、一番嬉しいんだと思う。また、ぼくにとって支えになる言葉は、「無理しなくてもいいんだよ」である。この言葉は、自分のペースを乱さない魔法の言葉だ。家族が亡くなってしまふとこの言葉が使えない。亡くなってしまふと、もう二度と会えなくなってしまう。そのようなことになってしまふから、生きている間にたくさんつかって、今度はぼくが家族を支えていきたい。

家族は自分たちを愛している。いなくなると関わったすべての人が悲しくなってしまう。だから家族がいなくなってしまった人たちの分も、家族を大切にしたいとぼくは思う。これからは、「家族のありがたみ」、「家族と過ごせる嬉しさ」、「家族の大切さ」のことを考えながら、聞いているみなさんも生活してほしい。そして、たまには、家族の会話の中で、「ありがとう。」という言葉をつかってほしいと心から願っている。

令和7年度 飛騨市少年の主張大会 開催要綱

1. 趣 旨

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などとともに、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。

当大会は、子どもたちにとって、これらの契機となることを願い実施するものです。
2. 主催・共催

飛騨市青少年育成市民会議 ・ 飛騨市 ・ 飛騨市教育委員会
3. 期日・会場

令和7年6月15日（日） 9:30 ～ 12:00 神岡町公民館 大ホール
4. 部門・資格

中学生部門：市内中学校の生徒 小学生部門：市内小学校の児童
5. 発表内容

①社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など
 ②家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友だちとの関わりなど
 ③テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など
6. 発表要項

「5. 発表内容」①②③の中から1つを選び、5分以内で発表する。
7. 出場者の決定

各学校に作品を募集し、各校長より出場者の推薦を受け決定する。
8. 出場者

中学生部門：6名 小学生部門：10名
9. 表彰

優秀賞 （出場者全員）
10. 出場者の推薦

中学生部門については、選考委員会により審査し、2名を第47回少年の主張岐阜県大会～わたしの主張2025～飛騨地区選考会に推薦する。
11. 選考基準

下表のような論旨、論調、総合の3区分で採点する。

区 分	No.	審査のポイント
論 旨 (内 容)	①	鋭い感性で新鮮な主張であるか
	②	新しい情報や視点があるか
	③	個人の体験にとどまらず、一般性や社会性があるか
	④	提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか
	⑤	論旨が一貫し、構成がしっかりしているか
	⑥	事前に提出された原稿と大幅な内容変更がないか
論 調 (話し方)	⑦	主張の内容が共感と感銘を与えているか
	⑧	説得力のある話し方であるか
	⑨	話しぶりに熱意と迫力があるか
総 合 (態 度)	⑩	落ち着いて話していたか
	⑪	聞く人に強い刺激や印象を与えていたか
	⑫	発表時間が5分程度に収まっているか
12. 日 程

9:30 ～ 9:40 開会式 9:40 ～ 10:15 発表（中学生部門）
 10:15 ～ 10:25 休憩 10:25 ～ 11:25 発表（小学生部門）
 11:25 ～ 12:00 表彰・審査発表・指導講評・閉会・記念写真撮影

令和7年度
飛驒市少年の主張大会
～ 発表記録集 ～

作成：飛驒市青少年育成市民会議
